HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	知識社会学に関する学説・理論的研究 : K. マンハイムを中心に［論文内容及び審査の要旨］
Author(s)	小田, 和正
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(経済学)
Dissertation Number	甲第14167号
Issue Date	2020-06-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/79354
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Kazumasa_Oda_abstract.pdf, 論文内容の要旨

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

様式８

学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（経済学）　　氏名：小田　和正

学位論文題名
知識社会学に関する学説・理論的研究
――K. マンハイムを中心に――

本研究は知識社会学の理論、問題設定、そして経験的研究へ接続するための研究プログラムを再構築し、新たに展開するための基礎的研究として位置づけられる。

第 1 章では、K. Mannheim の知識社会学において認識・知識の社会性と個体性とがどのような関係のもとに把握されているのかを検討している。近年の Mannheim 研究では、「知識の存在拘束性」を主張する Mannheim がけっして認識・知識の個体性を否定しているわけではない、という見解が示されている。しかしそうした研究においても、認識・知識の社会性と個体性との関係が Mannheim においてどのように把握されているのか、必ずしも明確に提示されているわけではない。そこで第 1 章では、Mannheim 初期の解釈理論と知識と存在とを関連づける手続きとして示されている帰属化の議論とが連続したものであるとの立場に立ち、まずこれら二つの議論をテクスト内在的に検討することを通して「存在拘束性」概念の意味を再提示している。そしてそこでの議論を基礎として、Mannheim が「知識の存在拘束性」の理論の内部で、どのように認識・知識の個体性を位置づけているのかを示した。すなわち、Mannheim は、個人の個々の体験への意味づけを間主観的な意味づけの枠組みと結びつけて解釈することによって、認識・知識の個体性をもまた存在拘束的なものとして把握しているのである。存在拘束的な枠組みのなかで認識・知識の個体性が生じるのは、各人の「体験の流れ」や具体的な社会関係における各人の位置の差異によるのである。

第 2 章では、Mannheim が提示する客観性概念と関係主義の理論を再検討し、それらの現代的意義を示すことを試みている。その方法として第 2 章では、M. Weber の客観性概念と Mannheim の客観性概念とを対比的に論じている。Weber が客観性の基盤として「普遍的文化価値」、普遍妥当な「思考の規範」、「共有された経験的知識」という三つの要素を想定するのに対し、Mannheim は認識の社会性とパースペクティヴ性を提起し、「知識の存在拘束性」の主張を徹底化することで、そうした Weber の諸想定を退けていた。その代わりに Mannheim は、ある特定の意味が特定の意味体系との関係において成立するという関係主義の立場から、二つの水準の客観性概念を提示している。ここではそのような Mannheim の客観性概念と関係主義の理論が、民主的討議・公共的な相互批判の可能性を担保しようと意図されたものであることを示し、さらに、三つの reflexivity 概念を用いることによって関係主義の理論がもつ意義を定式化した。

第 3 章では、知識社会学一般に伴われる知識と存在の二元論という根本問題にアプローチし

ている。その確立者である K. Mannheim がそうするように、あらゆる知識が社会的に制約されると規定する場合、知識社会学の二元論的構図はジレンマに陥る。二元論の両極はいずれも知識であり、もし社会的存在を説明されるべき知識の関係項として実体的に扱うなら、知識の普遍的な社会的制約性の主張と矛盾するように見えるからである。ここで試みる解決の基本方針は、知識社会学を知のホーリズムとして定式化するというものであり、それに向けて第 3 章では、Mannheim の知識社会学が W. V. O. Quine が提起する知のホーリズムとしての性格をもつこと、逆にその Quine のホーリズムは知識社会学化される必要があること、Mannheim と Quine を補完する議論として A. Schütz の知識理論を位置づけうること、そしてその Schütz の知識理論もまた独自の知のホーリズムとしての特徴をもつことを論じる。最後に、知識社会学を知のホーリズムとして定式化する際の Schütz の貢献を明確化し、知識社会学の根本問題の解決に向けて残された主要な課題を指摘している。

第 4 章では、U. Beck に代表される時代診断的研究の基本構図と諸機能、社会学理論としての諸特徴を理論的に整理することを通して、時代診断学が社会学的研究のなかに固有の位置価をもつことを理論的に明らかにしている。そのために第 4 章では社会学的時代診断学という K. Mannheim の先駆的な構想に着目し、彼の構想を批判的に再検討するという方法を採っている。彼の構想に見出される不備を修正することで、時代診断学における「時代」や「社会」の概念を明確化し、「診断」や「処方」の概念もまた理論的に再規定することができるからである。その上で、時代診断学について近年なされている議論の一部を参照しつつ、時代診断学が果たす独自の諸機能、および社会学理論としての諸特徴について整理している。第 4 章で提示する時代診断学における時代／社会概念とは、そのときどきに人々が抱く〈社会像〉＝包括的な状況の定義であり、時代診断学はその診断において、そのときどきの社会状況に基づいてそうした状況の定義を解釈し、社会状況に非適合的な状況の定義やその定義が依拠する解釈図式を批判する。そしてその処方において、社会状況に適合的な状況の定義や解釈図式を提案する。これが第 4 章で提示する時代診断学の基本構図である。こうした診断・処方によって時代診断学は、直示的機能、パラダイムの刷新機能、公共的機能という 3 つの機能を果たしうる。これらは通常の社会記述や社会理論が担う機能とは異なると同時に社会学的研究に不可欠の機能であるがゆえに、社会学的時代診断学は社会学的研究のなかで固有の位置価をもつと言える。

第 5 章では、1990 年代以降にドイツ語圏を中心に生じている新しい知識社会学の研究動向に着目し、そのなかでも R. Keller が提唱している「知識社会学的言説分析」に焦点を当てている。Keller の知識社会学的言説分析とは、知識社会学と言説分析という異なる伝統をもつ知識分析の枠組みを統合し、知識の生産や流通、それらの変化をマクロな水準で経験的に探究するための研究プログラムを提示しようと試みるものである。本章ではその理論的な骨組みを紹介するとともに、Mannheim との対比を導きとして若干の批判的考察を行っている。第 3 章で主題的に扱ったように、とりわけ古典的な知識社会学には物質と精神、存在と知識という二元論的構図が伴われるが、Keller の知識社会学的言説分析もまた言説を生み出す社会構造的条件と言説によって生み出される意味論という分析構図をとっている。そしてそうした二元論的構図に関する Keller の理論的基礎づけは不十分なものであり、それゆえに第 3 章で扱った知識社会学の根本問題から逃れられていないことが指摘される。とは言え、Keller の研究プログラムはマクロな言説の生成や変動を分析しようとする際の有益な枠組みを提供するものであり、その枠組みを使用する研究者によって概念枠組みや方法論について修正・補完されることにも開か

れたものである。第 5 章の最後では、知識社会学的言説分析の具体的な分析手続きの議論や、その Keller の研究プログラムの時代診断的ポテンシャルなど、本稿で十分に扱えなかった議論に加え、二元論についての理論的な問題についても今後筆者が検討すべき課題として位置づけている。

論文の題名が外国語の場合には，日本語訳を（　）を付して記入すること。
要旨は，３，０００字以内にまとめること。